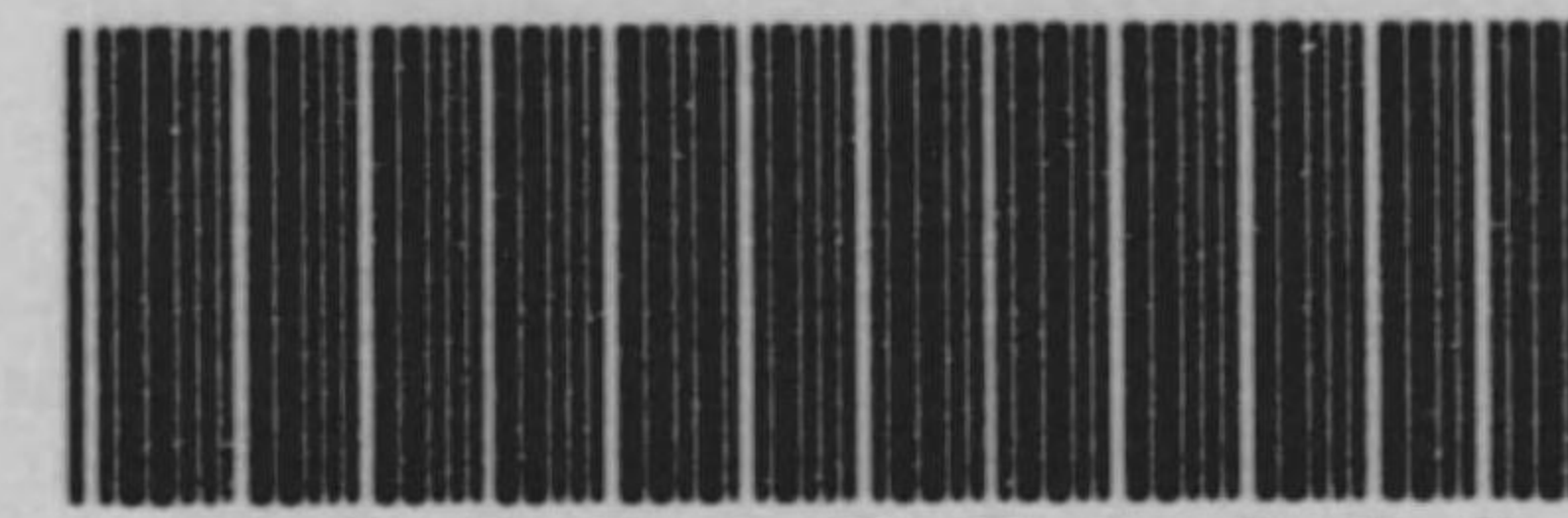


149

蘇聯邦東方政策の真相

内
2
2

昭和八年九月三十日
陸軍省調査班



* 0000877000 *

0000877-000

666-82

蘇聯邦東方政策の真相

陸軍省調査班・編

陸軍省調査班

昭和8

AAB

本書ハ某所ニ於ケル講話案ナリ參考ノ爲配賦ス。

目次

| | |
|--------------------|----|
| 一 緒言 | 一頁 |
| 二 各方面より觀察せる東方政策の真相 | 二 |
| 1 外交方面 | 二 |
| 2 經濟方面 | 四 |
| 3 赤化方面 | 八 |
| 4 軍事方面 | 一三 |
| 三 結言 | 一五 |

蘇聯邦東方政策の真相

一 緒 言

蘇聯邦の東方政策、それはかの「レーニン」の揚言した「世界赤化の運命は東方に於て決す」なる一言に盡くされてゐる。惟ふに蘇聯邦の外政窮極の目的は世界革命即ち世界赤化にあることは周知の事實であつて、彼等は「共產主義を完全に實行せんが爲には世界各國悉く共產主義國とならねばならぬ。即ち共產主義國家は資本主義國家の包圍の中に於ては成長し得ない」といふ「レーニン」の思想が其根本基調をなしてゐる。

而して蘇聯邦は此根本政策に基き、建國の當初先づ西歐諸隣邦の直接赤化を策したるも事志と、異なるや、列強の植民地的意義を有する東方諸國の、被壓制諸民族の解放なる名の下に、列強の經濟的根據を覆滅し、以て其手足を斷つを成功の最捷徑とする一大國是を確立するに到つた。是れ即ち蘇聯邦が其東方政策を強化せる一大要因であつて、其根本基調は蘇聯邦の死活問題たる世界赤化政策の主攻撃目的を東洋に指向せるものである。

而して其政策實施の爲には、表裏二箇の機關、即ち合法的機關と非合法的機關の二者を有する、前者は蘇聯邦政府であり後者は「コミンテルン」(國際共產黨)である。蘇聯邦の共產黨は「コミンテルン」の支部ではあるが、常に黨員數に於て過半數を占めるのみならず、實質に於て「コミンテルン」の全機關を操縦してゐるのであつて、又現在の蘇聯邦政權を把握して居るものは蘇聯邦共產黨の主腦者である。故に右の三者は世界赤化國際的共產主義社會の建設を標榜する一つの渾然たる蘇聯邦共產黨を主位とする所謂三位一體的存在なのであつて、蘇聯邦共產黨首腦者の動かす齒輪が、蘇聯邦政權及び「コミンテルン」に傳つて此兩者を活躍せしめてゐる。

要するに蘇聯邦東方政策なるものは、其世界赤化の實現と云ふことに歸納せらるゝが、之が實現の爲に取りある手段は千差萬別であつて枚舉に遑ないが以下便宜上二三の項目に分ちて其大綱を述べることとした。

二 各方面より觀察せる東方政策の真相

1 外交方面

蘇聯邦の國際的不信は、其建國の當初帝政時代の國際貸借(其實尨大なる負債のみといふも過言でなかつた)を一方的宣言で破棄したのでも明瞭であるが、かの「カラハン」が「東洋に於ける舊帝政時代の權益は總て之を放棄する」と好餌として支那の正式承認を得たるも、其國力恢復に伴ひ漸次其主張を強化し、前言を食んで平然たる如き之を裏書するものであつて、蘇の外交なるものは實は對外赤化政策の「カムフラージュ」の役目に過ぎないのである。即ち眞の對外政策たる赤化の實行は非合法機關たる「コミンテルン」之に當り、銳意赤化侵略を是れ努めつゝ、一方合法的外交機關たる蘇聯邦政府は只管國際平和主義を振り翳し、不侵略を標榜して他意なき態度に出て居るのである。かの國を擧げて軍備擴張に汲々たるに拘らず、國際聯盟軍縮會議に於ては軍縮を超越して一舉軍備撤廢案を提唱するが如き、表面的には全く一意世界の和平に餘念なきを標榜してゐる。

滿洲事變以來の皇軍威力の發動を見るや、西、南隣接諸國に對せしと同様、我國に對しても不侵略條約を提唱し、又最近北滿鐵道讓與問題の提起の如き是れ又日滿に對する

親善の外他意なきを表明してゐる。

又昨年十二月滿洲問題に焦慮せる支那が以夷制夷の政策に基き蘇聯邦との復交を提議するや、蘇聯邦は好機逸すべからずと爲して、直ちに之れに應諾し再び正常の外交關係に入つたが、將來一層支那方面に對する蘇側の活動を増進すべく、聯露容共時代に嘗めたる苦杯を再び喫するの虞なければ幸である。

次に米國の蘇國承認問題も最近論議せられてゐるが、尙承認迄には多少迂餘曲折はあるべきも、不況打解の一策として、或は對日壓迫の一助として、急速承認に進むの可能性亦皆無でないから、蘇聯邦が極東政策實施の爲之を如何に利用するやに就ては注意を要する。

2 經濟方面

一九二八年第一次五年計畫を企畫し其實行に入るや、無限の資源を擁する西伯利の處女地は好個の發展地域となつた。而して之れが開發の爲第一に着手せられたのは、「トルクシク」鐵道の建設であつて、西伯利の中心と土耳其斯坦とを結ぶ外蒙新疆國境に沿ふ延

長千四百軒の大鐵道は完成せられ、これが經濟政治軍事上多大の價值を有するは多言を要せざる所である。

次に蘇聯邦は「ウラル」——「グズバス」地方に工業大中心地の建設に着手した。從來蘇聯邦重工業の中心は「ドン」河流域であつたが、今や「ウラル」の鐵と「グズネック」の石炭とを結んで製鐵年額二百五十萬噸を企圖してゐる。即ち此處丈けでも全日本の産鐵額の二倍に相當するのであつて、此「ウラル」——「グズバス」の建設が經濟上に重大なる意義を有するは勿論、特に蘇聯邦の東方經營發展の爲には其據點の東方躍進であつて、軍事上及政治上最注目を要する所である。

西部西伯利の經濟發展に伴ひ、同地方の鐵道輸送力増加を要求するに至つたことは自然である、之の要求を充さんが爲目下西伯利幹線の改善、併行鐵道の建設に努力してゐる。即ち最近「オムスク」、「ヴファ」間の複線工事其他所々の鐵道橋増設工事完成を見る、又西伯利鐵道南方の併行線たる「クスタナイ」より「アクモリンスク」を経て「カラガンダ」に至る鐵道は目下建設中にして本年中には完成すべく、本鐵道は更に延びて「セミバラ

チニスク」に出で「トルクシブ」鐵道に結ばれる豫定である。又昨年来「ザバイカル」鐵道「カルイムスカヤ」——「ウルシア」間の複線工事を始め漸次之を「ウスリー」鐵道に及ぼす豫定である。更に「バイカル」湖北方迂廻線の建設が計畫せられてゐる。

次に航空路であるが、之亦異數の進展を示し、莫斯科——「イルクーツスク」間並「トルクシブ」鐵道に沿ふ地區の幹線を基線として、無數の支側線を分派してゐる。尙「イルクーツスク」——浦鹽間の航空路も完成し、既設の哈府——樺太線と相俟つて蘇聯邦の東方進出に多大の貢献をなすであらう。

以上の如く從來唯一條の西伯利鐵道を有するに過ぎず、又工業も何等見るべきものが無かつた西部西伯利は、現在既に工業及交通上に顯著なる進展を見せてゐる。之れが極東に伸びるのも茲數年を出でぬであらう。かくて蘇聯邦五年計畫の遂行は、國民の生活を悲惨のどん底に落入らしめたるに拘らず、軍事的立場から觀察すれば、寔に重大なる進展をなしたのである。即ち該計畫の骨子たる重工業の發達は、是れ總て軍需工業の要素であると稱するも過言でないのみならず、質的要素こそ劣るも戦時工業の特質として、最

も重視せらるゝ量的方面は偉大なる躍進を示し、近代戦必須の要求を整備せるものと見るべきである。現に本年當初「スターリン」の第一次五年計畫に關する演説中「蘇聯邦の國防成れり」と豪語せるに見るも明である。

かくて蘇聯邦當局は畢世の努力を傾注し、全く戦時同様の意氣と状態とを以て驀進し既に五年計畫を四ヶ年に完了し、更に昨年秋より第二次五年計畫に邁進してゐる。而して本計畫は依然重工業に重點を置き、又地域的には極東地方を以て第一となしあるは特に注目を要する所である。又數年來極東地方の戦時要員充足の困難なるを憂ひ、毎年數萬の除隊赤兵を極東移民として蘇滿國境地帯に移住せしめ、共營農コルホーズに従事せしめてゐることは、蘇聯邦將來の眞企圖の那邊に存するか察知するに足るのである。

斯の如き逐年の驚嘆すべき經濟上の發展は、啻に國防力の増大に資すること大なるのみならず、「ダンピング」其他の經濟的壓迫を以て市場を攪亂し、勞資協調を破壊し、以て相手國の赤化を容易ならしむる効果大なるものがありと見られてゐる。

蘇支復交後浦鹽——上海航路に優秀船九隻を配し「ダンピング」的強行輸出を實施しあ

るが如き之の一片鱗と見るべし、又最近日本に對する石油の廉價輸出は同業者及使用者間に多大の衝動を惹起してゐる。斯くの如き小輸入すら斯くの如き結果を齎すのであるから、將來蘇聯邦復興後大規模の「ダンピング」に際して國內が如何なる影響を受くべきやは思半ばに過ぐるものがあらう。

3 赤化方面

蘇聯邦東方赤化政策の進展経路を觀察するに、概ね左の如き幹線に沿ふものと認められる。

- 1 北滿鐵道——北滿路
- 2 外蒙——察哈爾張家口——北平路
- 3 新疆——甘肅——黃河流域路
- 4 浦鹽——海路——上海——揚子江路
- 5 「トルキスタン」——西藏印度路又は波斯路

而して先づ東方赤化の「モットー」たる被壓迫民族の解放の旗幟を鮮明にし、且代表的

諸民族の爲共產主義の理想郷の標本たらしめ以て赤化経路を容易ならしむる目的を以て、故らに東方自己接壤地域内に共產自治圏を建設して、實物教育に供した。かの外蒙古に近き「ブリアート、モンゴリ」共和國、或は新疆に近き「タジキスタン共和國」の如き皆夫れである。

而して蘇聯邦政府と不可分の關係にある「コミンテルン」が常に東方経路の先驅として活躍しつゝあるは、著名の事實であるが、其支援であり後楯である所の蘇聯邦政府の外交經濟軍備等、頗る密接なる連繫の下に行れてゐることは説明を要せざる所である。

イ 對日滿策動

帝國主義戰爭反對と被壓迫民族の解放とは、常に蘇聯邦の標榜せる所であるが、對日滿策動の爲、今次滿洲事變を以て直ちに資本主義國攻撃の好題材となしつゝあるは勿論、之を以て帝國の滿蒙政策妨害の有力なる武器たらしめて居る。其活動機關としては哈爾濱に位置する蘇聯邦哈爾濱縣委員會を中心とし、北滿鐵道を根據とし、鐵道従業員の一部を軍事的に組織し武力的援助の下に宣傳に努むる外、沿線各所には屢、「テロ」事件を誘

發せしめて居る。

又中國共產黨を経て、滿洲省委員會を使嚇し、以て滿洲國內に於て各種闘争を計畫實行せしめて居る。尙浦鹽に於て訓練せる多數の支那共產黨員を上海天津を経て潜入せしめ滿洲國各種機關に就職せしめ後日の根本的策動の鞏固なる基礎の確立を期してゐる。支那に於ては共產黨員を指導して反帝同盟、抗日救國聯合會の組織を畫策し蘇國より武器を供給して反日滿策動を強力ならしめんとしつゝあることを傳へられてゐる。之等は日滿協力の下に日夜平和建設に邁進しつゝある滿洲國の發展にとりていかばかり大なる障碍たるかは絮説を要しない。

かの朝鮮獨立運動に對する支援乃至は浦鹽を中心とする海員赤化を目的とする海員組合の活動或は浦鹽「ハパロフスク」よりする日鮮滿國語の放送は周知の事實であつて數次の帝國內の共產黨結成並指導特に自國敗戦主義の宣傳等は神聖なる國體に對する大なる積であつて天人共に許すべからざるものである。

□ 對支邊境地方の策動

蘇聯邦は夙に外蒙古に着目し、之れとの接壤地附近自國領に蒙古民族懷柔の爲、「ブリヤートモンゴリ」共和國を建設せることは、既に述べたる所なるが、一九二一年の西伯國內戰に於ける敗將、偶、外蒙古に退却するや、蘇聯邦は討伐に名を藉りて兵を外蒙に入れ、一九二四年遂に外蒙青年黨を支援して外蒙古を獨立せしめ、其後相互使臣を交換しあるのみならず、政治經濟特に軍事上の實權をも掌握して居る。最近滿洲國の發展に伴ひ外蒙古軍の基幹たる赤兵を増派して某種の準備の完了を期して居る。

又本年日滿兩軍の熱河肅清並北支進出に方りては察哈爾に蠢動しつゝあつた馮玉祥系軍隊に赤軍指導幹部を配し、且兵器彈藥を供給した形跡があるが、之は蘇聯邦の外蒙、察哈爾、張家口を縦貫して京津地方に進出するの野望に基くもので、張作霖時代に行つた馮玉祥及郭松齡援助の蒸返しである。

更に新疆に對しては既述の如く第一次五年計畫の際、多大の困難を排して「トルクシブ」鐵道を敷設し、新疆省に經營確乎たる根據を形成してゐる。即ち新疆省の交通状態は支那本土よりするよりも寧ろ西伯利鐵道を利用するを遙かに捷徑とするのであつて未開國に

於ける文化發達の方向が交通路特に鐵道を根據として進むるものなるに鑑み蘇聯邦の新
疆進出はもはや時日の問題である。蘇聯邦は蘇支斷交間にありても新疆との間には領事
館を置き其勢力扶植に努力してゐたが最近更に政府外交部内に新疆課を新設したるが如
き其關心の如何に大なるかを説明するものである。最近同地に勃發せる回教徒の反亂は
蘇聯邦の使嫉に基くものと支那側は觀察してゐるが曩に蘇領に遁入せる反滿軍の大部
(約二千と稱されてゐる)を長時日「トムスク」に於て、赤化訓練を施したる後新疆省内に輸送
したる事實と相俟つて其將來は益々多事なるべく將來甘肅を経て海蘭蘇方面より中支方
面に勢力を伸し次で中支共產匪軍と連絡する時支那の運命も豫測し得ざるものがある。

ハ 對支本土策動

「コミンテルン」極東局は蘇支復交と共に最近著しく其銳鋒を現してきた。

即ち先づ其の活動機關の整備に努力し上海「コミンテルン」の根據地を確立し、蘇聯邦
駐支外交要人を悉く有力なる共產黨員を以て充當し、而も之に配するに支那側の注意を
避くる爲其親米的傾向を利用して、身分を保障し得る如く米國共產黨員をして實際的策

謀に従事せしめてゐる。

又支那本土の赤化は燎原の火の如く進展し一九二六年頃は僅かに二、三萬に過ぎなか
つた共產軍は去年末には三十萬を算し、尙益々其勢威を増大しつゝありて、此の八月末
には其の主力たる江西省の共產軍は數次の中央政府の討伐(第四次討伐軍兵力六十萬と
稱せられてゐる)にも拘らず遂に福建省に深く進出し延平をも攻陥せりと傳へられ討伐
は不可能とさへ觀察されてゐる。

今や中國蘇政府の樹立せられある區域は實に八省(六〇七縣)中一七七縣に達して居る
のであつて、支那の前途は眞に憂慮すべき事態に陥りつゝあるのであつて、この蘇聯邦
の指導する赤化が支那方面に波及することは東洋平和の脅威であることは多言を要しな
い所である。

4 軍事方面

蘇聯邦の五年計畫が、國防充實に如何なる役割をなしてゐるかは、既述の通りである
が、最近に於ける軍備の擴張充實は實に驚くべきものがある。一九二七年は歩兵六九師

團、飛行機七〇〇、戦車一〇〇内外に過ぎなかつたが、本年に入り歩兵七六師團、飛行機二二〇〇、戦車少くも一六〇〇に急増する外、所謂機械化兵團の建設等軍需工業の發達に伴ひ、裝備の上に著しき發達を遂げてゐる。

又滿洲事變發生後極東地方に増遣せられたる兵力亦頗る多く、最近の觀察に依れば歩兵八乃至九師團、騎兵二師團、飛行機約三〇〇、戦車約三〇〇であり、尙陸續増加の形勢にある。殊に極東に於ける空中勢力を絶大ならしむる爲、異狀の努力を爲しあるもの、如く要地に於ける飛行場の新設擴張七噸積載量を有する超重爆機十數臺を整備せる模様であつて、本國に於ける航空勢力の至短時間の移動性と相俟つて壓倒的極東空中權の獲得を企圖しあるを候はれる。

其他滿洲國との接境地域中、樞要の地區には總て極めて堅固なる永久要塞地帯を、銳意構築中なるが如く、最新式堡壘鐵條網すら發見する、之等は勿論防勢的態度と見做し得ざるにあらざるも、近代築城の常に攻勢的據點として偉大なる役割をすることは特に留意を要する、尙浦鹽要塞の修復、同港に於ける潜水艦艇水、船渠の復舊新設等の情報

は注して看過し能はざる事項であつて、殊に超重爆機機の整備の如き攻勢的意義を有することは説明を要しないのである。

今や蘇聯邦は第二次五年計畫の完成に向つて只管努力を續けてゐるが其内容充實の曉如何なる動向を採るべきかは吾人が今より刮目すべきである。

三 結 言

以上蘇聯邦東方政策の大體を検討したのであるが、之を要するに、蘇聯邦は現在に於ては表面帝國に對し事を構ふるの意志なきが如きも裏面に於ける「コミンテルン」の策動は依然として繼續せられ其東方經略の根本方策には寸毫の變化なきと見るのを至當とすべく、現に帝國との接觸以外に於ける其活動は見るべきものがある。

而して東方政策の進展が滿洲方面よりすると、はた又他方面よりするとを問はず、東洋平和の確保を大使命とする帝國の嚴然たる存在と、氷炭相容れざるものなることは謂ふまでもない。されば著々進行中の第二次計畫の末期は聯盟離脱の効果の現はるゝ時であり又倫敦海軍縮條約更改期に相當するのであるから其際蘇聯邦東方政策に如何なる

轉歸を示すべきかに就ては多大の注意を拂ふと共に、滿蒙建設の具現と兵備の完成により不可侵の事實的鐵壁たらしむるを要する。

